

英語による日本のガイドブックに見る言説の変遷

——2つの出版最盛期におけるマレーとロンリー・プラネット——

ミルン・ダニエル

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 本稿は、英語で書かれた日本を紹介するガイドブックにみられる観光言説を、ポストコロニアル理論を用いて分析するものである。英語で書かれた日本のガイドブックが盛んに出版された時期は2度あり、19世紀末と20世紀末である。本稿では、19世紀の『マレー日本』と20世紀の『ロンリー・プラネット日本』を対象にし、2つの時期における重要なガイドブックシリーズの日本版にみられる日本の表象を分析する。この日本の表象を「旧一新」軸と「東ー西」軸という2つの観点から分析し、日本の観光言説はオリエンタリスト的であると言えるか、さらにそれがいかに変化してきたかについて考察する。本稿で明らかにしたのは、2つの時期それぞれにおいて、またそれらの時期の間にも、日本に関する観光言説は変化し多様化したということである。そして、この言説の変化は、英語圏諸国と日本の間の歴史的出来事や日本の社会的変化及びガイドブックの編集方針に結び付いていることを解き明かそうとするものである。そして、本稿で取り上げるこれらの日本に関する言説は、日本を「旧い東洋」として西洋諸国との違いを強調する伝統的なオリエンタリスト言説か、あるいは「旧一新」「東ー西」の対比や融合のなかで捉えようとする新しい形のオリエンタリスト言説かのいずれかに当たるものであることを述べる。

I はじめに

世界中で外国に観光旅行に出かける人の数は2012年に初めて1年間に10億人を超え、また年3～4%程度増え続けると予測されている(UNWTO 2013)。社会学的研究はこの産業の巨大さとその規模の増加、または社会的影響にうまく追いつけていない(Morgan & Pritchard 1998, 4)。近年、旅行者の重要な情報源としての観光メディア、およびそこから発信される他国の表象に関する研究は進んでいる一方、主要な観光メディアである観光ガイドブックの研究はまだ充分ではない。さらに、日本についての研究は殆どなされていない。本稿は、英語で書かれたガイドブックにおける、日本についての表象を分析するものである。これには3つの目的がある。第1は、英語の観光言説のなかにみられる日本の表象を「旧一新」軸

と「東ー西」軸に沿って分析することにより、日本の観光言説はオリエンタリスト的であると言ってよいかどうかについて考察することである。第2はこれらの日本に関する言説はどのように変遷してきたのかを理解することである。第3は日本の例から広げて、非西洋の観光における言説はいかに変遷してきたかについて考察することである。本論文では、他国(特に西洋からみた非西洋の国)の表象と言説、または言説の変化と国々の間の力関係を明らかにするために、ポストコロニアルリズム理論を援用することにする。

II 研究の意義と目的

1. 観光ガイドブック分析の意義

観光の拡大とともに、観光は大衆文化の重要な要素となった。観光ガイドブックは、パンフレッ

ト、インターネットサイト、雑誌の記事等と並んで、目的地での観光や出発前の準備等の情報を提供することにより、観光をより容易・安全にし、観光目的地の宣伝をするためのメディアである。現在、人々は世界的にますます観光メディアを利用している。こうしたメディアの広範な普及にも関わらず、観光メディアにおける異国の表象を分析する研究は、1990年代に入りようやく出現した (Morgan & Pritchard 1998 ; Selwyn 1996)。

異文化間のテキストとしての重要性にも関わらず、観光ガイドブックシリーズの研究は少なく、異文化の表象の研究のなかで比較的遅れている。観光ガイドブックが重要である理由として、以下の3点が挙げられる。第1に、情報源としての重要な役割や、旅行の行動を導く力を指摘したい。「存在さえ知らない、有るかどうかさ意識化されていない場所へ、人は向かうことはできない。するとガイドブックというメディアは、旅行者の体験を全的に縛らないが、しかしその視野の枠組みを構成し規定する、重要な情報源であるといえる」と山口誠は論じている (2010, 234)。また、Bhattacharyya が述べるように、「観光ガイドブックは旅行者と目的地、また地元民と旅行者の関係を媒介するもので、観光のプロセスの中心的な役割を果たす」(1997, 372)。このため、旅行者の地元民に対する行動、考え方、触れ合い方においてガイドブックは多大な影響力があるといえる。第2に、ガイドブックは異国に関する支配的な言説を広めて、発展させるための重要なメディアである (Tegelberg 2010)。Behdad はこの視点から、19世紀からガイドブックが旅行記に代わって、「オリエンタリスト的観光文献において支配的言説の媒介」となったと述べる (1994, 37)。第3に、山口が述べているように、「ガイドブック・シリーズは、その時々の出発地と目的地の文化を誌面上に色濃く反映させるだけでなく、新たな真似と追体験のきっかけを生み出し、多くの人々へ提供していく」(2010, 223)。このため、ガイドブックシリーズは異国に対する言説の変化を反映するもので、このような研究においては重要である。本稿は第1の点にも関わりがあるが、主に第2と第3のガイドブックにおける他国の表象の形成と

その継続性に焦点を当てる。

2. ポストコロニアル理論と日本

ポストコロニアル理論は、非西洋に関する西洋の表象や言説を理解するために、「東-西軸」にしたがった枠組みを与えるものである。この理論は「オリエンタリスト的言説」、すなわち、西洋と非西洋間の歴史的に不平等な力関係から生じた非西洋についての言説を、批判的に分析するものである。この「オリエンタリスト的言説」では「旧-新軸」にしたがって非西洋を西洋より劣等と見なし、西洋と非西洋を対立的に扱う。1990年代以降、ポストコロニアル理論はいくつかの批判を受けながらも発展してきた (Macfie 2000)。初期のポストコロニアル理論においては、対象となる非西洋社会の多様性に関わりなく、オリエンタリスト的言説は西洋全体において一様であるかのように述べられたが、そうすることによって、ポストコロニアル理論は皮肉にも、それが本来批判すべき「東-西軸」に基づく分類や本質化を逆に強める結果になったと言われる (Richardson 1990)。このような批判の結果、最近のポストコロニアル理論に基づく研究は国や地域レベルに特化した方向に進んでいる (Elliott 2010 ; Kato 2010)。また、オリエンタリスト的言説を多様的で流動的なものとして捉える傾向もみられるようになった (King 1999)。

オリエンタリスト的言説を定義づけ、分析したポストコロニアル理論の初期の代表作としては、Said の『オリエンタリズム』が有名である (1978)。Said によれば、この言説は、宗主国 (西洋) と植民地 (非西洋) の力関係に基づいている。オリエンタリスト的言説では、非西洋は後進的であり、性欲的、不道徳的で西洋の正反対に置かれている。対象となる非西洋社会の古代史は美化され、オーセンティック (真性、本物) であるのに対し、その社会の現代文化は、単に古代史の継続ないしは劣等的文化で、重要ではないとされる。この今は古典となった Said のオリエンタリスト言説の分析を踏まえながら、Behdad は、19世紀からの大衆観光の誕生と発展に伴って、観光的オリエンタリスト言説は非西洋に関する主

要な言説になり、観光ガイドブックはこの言説の中心的メディアになったと述べている(1994, 37). このように新しく観光的オリエンタリスト言説の研究が登場したことにより、Said が一般化したオリエンタリスト言説の分析に加えて、さらに多様なオリエンタリスト言説が研究の対象になるようになった。観光的オリエンタリスト言説は、西洋観光業の非西洋への拡大と深く関わっていると、Behdad は論じている(1994). 1990年代以降の観光的オリエンタリスト言説の研究の発展に伴って、いわゆる「途上国」についてのガイドブックの研究が進んだのである(Bhattacharyya 1997; Tegelberg 2010).

ガイドブック等の観光メディアのオリエンタリスト言説において、「オーセンティック」(真正、本物)と「オーセンシシティ」(真正性)は重要な概念である(MacCannell 1976). 目的地の様々な要素を説明しながらも、ガイドブックはそこにあるものをオーセンティックで旅行者に面白いと感じるように描写し、他のことを偽物で面白くないと描写する。ポストコロニアル理論により、観光的言説は非西洋の社会の伝統文化と過去をオーセンティックとし、現代文化をオーセンティックではない、または興味深くないものとして表象する。

日本に関するオリエンタリスト的言説について考察するに当たって、注意すべき重要な点がある。Behdad の説では、非西洋の「途上国」は、西洋の観光業界の強い影響力のもとにあり、そのことが、オリエンタリスト言説が支配的になった理由の一つだとされる(1994). しかし、日本では、西洋の観光業界は大きな経済的影響力をもっていないので、日本に関するオリエンタリスト言説は、必ずしもこうした経済的支配-被支配関係から生じたものではない。Minear が指摘するように、日本は西洋諸国の政治的・経済的支配下に置かれていないにもかかわらず、日本に関するオリエンタリスト言説は存在しているのである(1980). これらの言説は他の非西洋の国々が英国等の西洋国の植民地支配下に置かれた際に形成された後、日本に関する言説に再利用されたと Minear は推測する(1980). さらに、日本と西洋の力関係の

いきさつを辿ると、オリエンタリスト的言説が英国から米国へと「移動した」という理論を支える論拠があるとも述べられる(Befu & Kreiner 1992; Said 1978).

3. 先行研究と本稿の目的

Yokoyama の 1850 年代から 1890 年代にかけての英国の評論や学術誌を対象にした詳細な研究は、19 世紀の英国メディアにおける日本の表象を明らかにした(1987). 19 世紀後半の日本の現代化、西洋化しつつある姿にかかわらず、当時の論文は現代日本の実状を報道せず、日本のエキゾチックな側面、奇妙さ等の西洋との相違を強調する表象が続いていたと Yokoyama は論じた(1987). それと同様、1850 年代から 1905 年までの日本についての言説を分析する Lehmann の研究は、多様な言説を見出す一方、日本と西洋を分ける溝を強調する言説が中心であることを指摘している(2011).

日本以外のアジア諸国に関する観光オリエンタリスト言説を扱ったものとして、Bhattacharyya による研究が挙げられる。Bhattacharyya によると、『ロンリー・プラネット——インド』の 1993 年版のガイドブックのインド表象は、過去や伝統を美化し、オーセンティックなものとして扱うのとは対照的に、現代を無視する傾向があるという。この意味で、類型的なオリエンタリスト言説を踏襲するものだというのである(1997). 同様に Tegelberg は、『ロンリー・プラネット——カンボジア』の 2005 年版は古代歴史に焦点を当てており、フランスの植民地支配下の言説を再現し、現在に至るまでのカンボジアの人々の様々な試行錯誤の歴史を無視すると論じた(2010). しかし、これらの研究ではガイドブックシリーズにおける言説の変化とその可能性には触れておらず、また途上国のみを論じることに限られている。一方、Santos は、米国新聞の観光記事にみられるポルトガルの表象を研究対象とした(2004). この研究では、非西洋社会でも植民地でもないポルトガルのような国に関する言説においても、伝統と現代というオリエンタリスト言説と同じような枠組みが使われていることが指摘され

ている。Santosによれば、この一見、二項対立的な枠組みは、実は現代化に影響されていない統一した社会への憧れやノスタルジーに基づいており、伝統と現代性という二つの側面を相互依存的なものとして捉えているというのである。観光メディアにおけるオリエンタリスト的言説は多様性があり、途上国、非西洋諸国や旧植民地に限られず、全ての観光的言説にみられることを示しているのである。Morgan & Pritchardが観光学において、異国に関する差別的表象は「途上国に限られているような論議が多すぎる」(1998, 4)と述べる際は同様のことを指摘しているのであろう。この点から見ると、現代の観光メディアにおける異国の表象を一層深く理解するためには先進国を研究する必要があるだろう。

さらに、Iaquintoは、ガイドブックの制作に影響を与えるのは筆者だけではなく、特に編集者、またガイドブック会社全体の方針が大きく関わることを、『ロンリープラネット』シリーズの作者たちを対象にした質的調査によって明らかにした(2011)。ロンリー・プラネットの対象読者が広がり、市場が拡大する中で、編集者の力が強まり、内容が「政治的に正しく」、保守的になってきたとIaquintoは述べた(2011, 720)。

本論文の趣旨は1つのガイドブックシリーズの中で、または異なる時代のガイドブックの比較研究を通じて、言説の変化を明らかにすることである。この両方の研究は行われていないと思われる。さらに、本稿が対象とする先進国についてのガイドブックにおける言説の研究も殆どなされていない。

Ⅲ 歴史的背景

1. 19世紀末と20世紀末の日本についての英語言説

いうまでもなく、英語圏の日本言説は絶えず変容しており、日本の社会的変化や英語圏諸国との関係の変化によって影響されてきた。Yokoyamaが指摘するように、英国で出版された書物における鎖国下の日本の表象は、日本を神秘的でミステリアスであるとするのでエキゾチックなものを

求める読者の期待を高めようとした(1978)。「日米和親条約」(1854)等の西洋の強国とのいわゆる「不平等条約」、そして明治維新を経て、西洋諸国の人々は徐々に訪日できるようになった。彼らが訪れた日本は西洋からの技術、学問、政治思想や文化的流行を取り入れようとし、政治的、社会的に急激に変化しつつあった。Lehmannによると、日本の西洋化を支持するものからそれを強く批判するものまで、当時の英語圏における日本に関する言説は多様であった(2011)。日本について執筆した小泉八雲等のロマン主義者や旅行作家は、西洋文化の影響力の拡大を批判しながら、日本にみられる東洋の伝統の「真髄」を美化し、東洋を古代からの伝統をもつ神秘的で賢明な文明であると表象した(Lehmann 2011, 138)。19世紀後半から、欧米ではダーウィンやスペンサーの論理から生み出された人種や文化の進化に関わる言説が流行していた(Hofstadter 1992)。この言説に影響され、Carrが「救助紀行文」と呼んだような、非西洋地域の文化が西洋の強い文化によって絶滅する恐れがあると書かれた非西洋についての旅行本も存在したのである(2005, 82)。他の言説は、日本を人種、モラル、また経済、文化、軍事などあらゆる側面で西洋の強国に劣っていると語り、日本を美的に優れてはいるが、子どもっぽく弱いものと見なした。(Lehmann 2011, 151)。しかし、日英同盟(1902年)にみられるように、日本が日清戦争(1895年)や日露戦争(1905年)で勝利者となってからこの言説は否定され、日本は英語圏諸国からより平等に扱われ始めた。英国新聞 *The Times* に日本の力の過小評価は「観光ガイドや観光客に責任がある」と書かれたように、日本を脆弱な存在として評価するイメージは観光と深く結びついていると思われていた((1904) Lehmann 2011, 151)。しかし、日本の当時の戦勝や貿易における成功は「黄禍論(yellow peril)」の流行を引き起こし、パリ講和会議(1919年)でみられるように、日本と英語圏諸国の外交関係に悪影響を与えた(Lehmann 2011)。

Dower等が指摘するように、第二次世界大戦は英語圏での日本についての20世紀の言説に重大な影響をもたらした(Dower 1986; Kato 2011)。

満州事変から真珠湾攻撃にいたる太平洋戦争中の様々な「残酷な」事件が英語圏の日本人に対するイメージに影を落とし、西洋人と根本的に違う、または猿のように原始的あるいは超人的で脅威的であるという日本および日本人に対するオリエンタリスト的表象が強化された (Dower 1986)。また、戦後になると、連合国軍や米軍の兵士が駐留する日本は、彼らのための「娯楽の地」であるとする表象もあった (Dower 1986)。さらに、1970年代以降、西洋諸国と日本間の貿易競争が激しくなる中、戦争の恐怖や「黄禍論」が再現した。1970年代まで、日本のGDPは世界2位であり、1980年代を通してますます拡大した。英語圏のメディアにおいて、日本の経済力の急激な上昇のために、貿易摩擦が生じたというニュースが報道され、日本に関する表象は日本の現代性や日本への尊敬を示しながら、敵意と恐怖を感じさせた (Wilkinson 1991)。こうした経済的成長は近代において非西洋国で初めて生じたため、日本人を独特だとする言説が流行するようになった。さらに1980年代には、こうした日本特殊論が多数の日本人の意識に入り込み、自国や日本人としての自分たちが世界の舞台において独特で優れているというアイデンティティが生まれたと Oguma が論じる (2002, 319)。

その一方、戦後の米国の言説においては、現代の日本を認める傾向がますます強くなったと Minear が論じている (1980)。さらにその言説は、日本が西洋と相違しているか類似しているかをめぐって、振り子のように極端から極端へと目まぐるしく反転する傾向があったと、Sugimoto は述べている (2010)。つまり、英語圏の日本言説が本質的にオリエンタリストかどうかは明確ではないが、言説の変化は確かである。

2. 19世紀の英国観光と『マレー日本』

19世紀英国では、収入と余暇時間の増加、ならびに汽車、客船等の技術の発展により、観光は大衆化し、以前より広い社会階層に広まった (前田勇 2010)。こうした現象と共にシーサイドリゾート等の観光地において階層制度ができた (Urry 1990)。こうした観光の階層化の流れを受

けて、英国の上流階層の中には、英国や西洋諸国を離れ日本等の「非西洋」の国を旅行する人も少なくなかった。こうした旅行をすることにより、彼らは大衆化した「観光」から脱し、冒険的でオーセンティックな文化に触れる旅行をする「traveler (旅人)」としてアイデンティティを構築しようとしていた。しかし当時の多くの旅行者は安全性、利便性や効率性を重視していた。したがって、この需要に答えるための観光関連の新しい会社や観光案内のためのガイドブックが生まれてきた。当時のガイドブックの特徴は実用的、客観的で様々な情報が沢山載っているということである。当時のガイドブックを代表し、リードするのは、英国の「マレー」であり (Gretton 1993)、19世紀末には日本に関する英語で書かれた最も信頼されるガイドブックとなった。

しかし約19世紀半ばまで、徳川幕府の鎖国政策のために、海外からの旅行者の来日は禁じられていた。日本が正式に外国に対して開かれたのは1868年の明治維新になってからである。その数年前の1858年、外国の旅行者は日本の5つの主な港町に入ることが、ようやく許可されたばかりだった。その後、徐々に日本の各都市や日本内陸部へ立入ることができるようになり、1874年にはほぼ日本各地を旅行できる許可書ができた (横浜開港資料館 1996)。しかし、京都市等の一定の場所においては抵抗運動や暴力事件により、外国人向けの観光の発展が遅れた。1873年に初めて日本を訪問したトーマス・クックの世界一周ツアーなどの影響により、1870年代から英語ガイドブックの対象読者は日本在住者から旅行者へと移った (長坂契那 2010)。日本についての英語観光ガイドブックの最初のピークはこの時から始まった。しかしこうした日本観光の初期の時代、これらのガイドブックは100頁以下の本であった。日本を紹介する最初の包括的な英語ガイドブックは *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* (Satow & Mason 1881) で、出版されるとすぐにこのシリーズは英語のガイドブックの主流となった。

マレー出版社は1768年にロンドンで設立され、1836年から観光ガイドブックを出版し始めた。

マレー出版社は英国知識人社会で中心的な位置を占め、ロマン主義詩人バイロン、進化論者ダーウィン、探検家で英国の植民地主義を唱えたりビングストン等、当時の文化や社会を代表する人々の本を出版した。マレーは19世紀英国のガイドブック業界をリードしていたが、販売数は1880年代頃からドイツのベデカーの英語版ガイドブックに追い越された (Gretton 1993)。全部で *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* (以降は『マレー日本』) は9版あった。第1版は1000部印刷され、前書きには「この本の構成はできる限り『マレー・ハンドブック』の構成にしたがっている」(1881)と書かれているが、マレー出版社のものではなかった。この引用と本の実際の構成、著者の専門的知識、文章の調子や対象としていた読者から分かるように、この本はマレーガイドブックに大きく影響されていた。第2版から(1884)、本書は正式にマレーガイドブックシリーズに入った。この最初の2版の著者は Ernest Satow と A. B. Hawes だが、第3版からは Basil Chamberlain と W. B. Mason に入れ替わった。ガイドブックには Satow と Chamberlain が主要著者として示されているので次にこの両者について考えてみたい。

Satow は当時の日本学や日英関係において非常に重要な人物として知られている。彼は1860年代以降に中心的な英国外交官となり、最も初期の和英辞書を著し、日本アジア協会の設立に関わる等、多くの業績を残した人物であった。英国大使館で勤務していた間、Satow は明治維新を含め当時日本に起こった重要な歴史的転換点を目撃した。また、Satow は1874年に *A Guide Book to Nikko* を著し、それは、日本観光地を紹介する最初の英語ガイドブックとなった。Chamberlain は Satow と同様に英国の日本学を代表する人物で、19世紀の終わりから20世紀の初めにかけて活躍していた。彼は東京帝国大学文学部名誉教授として、日本の詩や古典を英訳し、日本社会や文化について書いている。 *Things Japanese* (1891) は彼の最も有名な本で、これもマレーが出版した。第1版の『マレー日本』(1881)の前書きの謝辞の中で、Chamberlain が最初に挙げられるということから

も分かるように、個人的、かつ学問的に、この2人には深い親交があった。マレーガイドブックの特徴として、殆どの場合、著者は当該国についての著名な専門家であった。マレーガイドブックの対象読者と著者は高い教育と教養を持つ上流階級出身者であったため、ガイドブックの表象は、「ひどい外国嫌い」を表に出さないようにしながらも、この階級の「利益と考え方」を反映したものである、と Gretton は述べている (1993, xxxviii)。日本版のマレーが中上流階級の人にしか買えない価格であり (Gretton 1993, xxxviii)、著者が日本についての専門家である点から考えると、こうした指摘は適切であろう。しかし、殆どのマレーガイドブックと異なり、日本版は完全にマレー出版社の所有物というわけではなかった。それは英国ではなく横浜で出版されており、約半分以上の広告が日本の会社のものであった。したがって、日本版は親会社や英国企業の経済的影響から比較的独立した中で制作された。

3. 20世紀の観光と『LP 日本』

第一次世界大戦で西洋の海外観光は急激に減少し (Carr 2005, 81)、これによってマレーガイドブックは廃刊となった。しかし第二次世界大戦後、海外観光は増加し、以前よりさらに大衆化した。その結果、英語の新しい観光的言説が生じてきた。これらの言説に影響し、またはこれらを普及させた新時代の観光ガイドブックが登場してきた。米国の *Fodors* と *Frommers* はその代表格で、その特徴としては、ユーモアがあり、現在の文化や地元を中心に切り上げ、また、「非観光的 (non-touristic)」である安い旅行をオーセンティックとすることが挙げられる。その影響を受け、60~70年代には「バックパッカー」の登場と彼らの需要に答える次の新世代のガイドブックが出現した。これらの英語のガイドブックの中では、*Let's Go*、*Rough Guides* と *Lonely Planet* 等が力を持っていた。しかし1990年代以来、*Lonely Planet* (今後、「LP」と表記) が世界最大の観光ガイドブック会社となっていった。戦後には *JTB* と *Frommers* の著書を含め、英語で書かれた日本を紹介するガイドブックが出版されたが、1980年代の観光及び

仕事で来日する英語圏の渡航者の増加をもたらした第2回のピークまで、出版数は少なかった。

戦後の海外旅行の増加は、飛行機等の交通技術の発展や経済好調の状態を基礎にしたものである。また、大学生や若者の旅行ブームが重要な観光の形態として出現したが、これは若者割引券、大学生割引カードや世界中のユースホステルの普及によるものである（山口誠 2010, 90）。この頃に登場したのが新しい形の旅行者、いわゆる「バックパッカー」である。一般的に言うと、バックパッカーは、比較的長期の安価な旅行を楽しみ、独立心と柔軟な旅行計画を持ち、さらにオーセンティックな文化を経験する「非観光客」的な「旅人」として表象されている（O'Reilly 2006）。1960年代及び1970年代からアジアはバックパッカー観光の中心地となり、伝統と宗教、いいかえれば「古代」アジアに関心が寄せられてきた。バックパッカー者数が増加した中、それまで冒険的と思われていたバックパッカー式観光が主流となり、体系化された（O'Reilly 2006, 1014）。さらに新型ガイドブックは、こうした新しい旅行スタイルを生み出した影響力のあるメディアとして、批判的分析の対象ともなった（Sorensen 2003, 860）。

LP（ロンリー・プラネット）は、イギリス人の Tony Wheeler と Maureen Wheeler 夫妻によってオーストラリアで設立された。その第1冊目は1973年に2人が敢行したイギリスからオーストラリアまでのユーラシア大陸横断の旅に基づいたものであった。現在、LPは世界最大のガイドブック会社となり、8か国語以上の言語で出版され、日本以外の多くの主な市場で成功している（山口誠 2010）。1970年代を通してLPは徐々に発展した。多くの他のガイドブック会社はヨーロッパを紹介することで評判を得たが、初期のLPはアジアや他の非西洋の旅行地を紹介していた。したがって、LPは英語におけるアジア諸国の観光的言説を反映し、先導しているといえよう。LPは1980年代から急激に発展し、拡大した。1981年の *Lonely Planet India* の初版は大ヒットし、LPにおける一大転機となった（Wheeler & Wheeler 2008, 145）。初版の *Lonely Planet Japan* は同年に出版された。1990年代からLPはほぼ世界

各国のガイドブックを出版し、富裕層を含めて幅広い読者をターゲットとするようになったが、80年代のLPは、まだ主に安い予算で旅行する人々向けにアジア諸国を紹介しており、英語のガイドブック市場においても首位ではなかった。

ここで、1980年代にLPから出版された *Lonely Planet Japan*（以後、『LP 日本』と表記）に影響を与えたいくつかの要素を指摘しよう。LPには1970年代および1980年代当時の一部の人々の間に流行していた自由な考え方があり、こうした考え方を持ついわゆるバックパッカーやヒッピーをガイドブックの主たる読者対象としていた。「9時から5時までのきりのないばかげた競争（rat race）から脱落した何千人の人々と連帯する」ように促し、またはマリファナを最も買いやすい国や偽の学生証の購入方法を紹介し、髪の長い男性が通関する時に髪をかぶるように勧めるなど、自由な旅を推奨するその編集方針はLPの最初のガイドブックに明らかにみられる（Wheeler 1973, 1, 42）。初期のLPは他文化に興味を持つ若者が主な読者層で、また一般的に内容は自由で、社会規範に批判的であったため、LPガイドブックは他の社会や国や人種に対する一般的な表象や言説を批判する新たなメディアであったと考えられる。

最初のLPガイドブックはWheeler夫妻が自身で記述したものの、1970年代後半からは外部の著者が関わるようになり、彼らが著作権を持っていた。初版の『LP 日本』はこの条件で書かれたようである。しかし、1980年代半ば頃からLPが著作権を所有するようになったために、以前よりもガイドブックに対する責任が重くなり、その結果内容をより厳しく管理するようになったと考えられる。編集における過剰な「政治的な正しさ」（political correctness）へのこだわりは内容を「ワークショップマニュアルのようにつまらなくする」とTony Wheelerは憂慮を表明している（2008, 287-288）。この引用から明らかなことは、LPが、文化的差異や多様性に配慮して偏りのない記述をしようとする一方で、好奇心や冒険心にあふれる読者に面白く楽しい内容を提供しようとする2つの編集方針のバランスを保とうとしていることである。この点において、近年、LPは政

治的に正しすぎる等と他の研究では論じられている (Jaquinto 2011). 商品として考えると、バランスを保とうとするこの方針は理にかなっているが、他国に対する観光的言説の形成や普及における LP の役割を考える上で、LP ガイドブックが国際的に不平等な勢力関係や誤解を招く言説を継続、支持するのか、またはそれらに疑問を呈する立場に立つのかは重要である。

マレーのガイドブックと異なり、1980 年代の「LP 日本」は手頃な値段で販売されており、しかも掲載されている宿泊施設や店舗に反映されるように低価格で旅行をしたい若者が対象となっていた。しかし、当時の日本観光は他のアジア諸国より比較的高価格であったため、日本は LP の代表的な国ではなかった。80 年代の「LP 日本」の読者は、若い英語教師、米国兵等仕事関係で来日する人々、日本旅行の高価格をあまり気にしない中・上流階級の旅行者に加えて、アジア経由で来日する安い旅行をしたい若者、つまり LP の典型的な読者であるバックパッカーであったと予測できる。著者に関しては、マレーと違って LP は日本の専門家ではなく、安価な旅行の経験がある若い著者が書いていた。

LP は日本のガイドブックを 12 版出版してき、それらは 3 人の主な作家によって書かれた。この論文では全て 1980 年代に書かれた第 3 版までに絞って分析をするものである。これら 3 冊の作家はカナダ出身の Ian McQueen であった。彼はオーストラリアのメルボルンで学び、そこで Tony Wheeler (LP の出版者) と知り合った。1978 年から彼は東京を拠点としていた。初版には編集者の名前が記されていないが、それは殆どの内容が McQueen の責任において書かれたことを示している。しかしながら、第 2 版からは編集者の名前も示されており、その多くは女性であった。全体としてのデザインやレイアウト、ガイドブックが扱う内容はその時代に確立された LP の形式にしたがっている。

IV ガイドブックの分析

1. 方法論

ここでは、日本についてのガイドブック出版の 2 つの最盛期におけるガイドブックシリーズを比較する。最初の最盛期は 1880 年代から第 1 次世界大戦の開始まで、第 2 の最盛期は 1980 年代から 2010 年代である。この論文はマレーと LP に焦点を絞るが、それはこの 2 つがこの時期に英語で書かれた日本についてのガイドブックシリーズのなかで最も成功し、広く読まれ、恐らく最も影響力のあったものだからである。日本の表象がいかに形成され、変化したかを理解するために、『マレー日本』の内の 3 冊 (第 1, 4, 8 版) と『LP 日本』の 3 冊 (第 1, 2, 3 版) を分析する。ここで取り上げる『マレー日本』の 3 冊が第 1, 4, 8 版に分散して、シリーズ全体を代表しているに対して、『LP 日本』はシリーズのなかの 1980 年代のみを取り上げている。これは本稿において LP 全 12 版を分析するには紙数が不足し、また、「旧一新軸」と「東一西軸」とに関わる表象についての主な変化は 1980 年代に起こっているからである。

ガイドブックには、旅において旅行者と地元の人との関係や情報を仲介し、さらに旅行の目的地についての言説を普及し変化させる固有の役割があるが、これらの言説はまた観光メディア全体を通じてみられるより広い言説の一部でもある。したがって、この論文は日本における 2 つの時期の観光言説の完全な分析を意図するものではないが、そのような言説を代表するメディアとしてガイドブックに焦点を当てるものである。さらに、ガイドブックの内容は読者によって単に自動的に消費されるものではないので (Bhattacharyya 1997)、この研究は、いかにガイドブックが使われているかについてではなく、そのなかにもどのような表象が示されているかについて明らかにするものである。

ポストコロニアル理論を適応するにあたっては、先に述べたような批判を考慮しているが、本稿では一般に「西」と「東」について語るというより、英語を話す主な国々 (米国、英国、オーストラリ

ア、カナダ)に焦点を当てている。しかし残念ながら、このような焦点の当て方は英語を話す他の国々や、英語が母語ではないが英語で書かれたガイドブックを使う人々を無視することになる。マレーとLPの2つのガイドブックは当時の日本に関する英語の観光言説を全て反映しているわけではないが、それぞれが当時の日本についての主要な英語のガイドブックであると考えられるので、これら2つには分析する価値があると思われる。なぜなら、これらのガイドブックはそれぞれの時期に日本についての標準的な言説を形作るのに重要な役割を果たしたと言えるからである。

それぞれのガイドブックの初めに置かれた日本紹介の部分(各約100頁)を「旧一新軸」と「東一西軸」の2つの観点から分析を試みる。「旧一新軸」に関わるキーワードは「伝統的」「現代的」「古代の」等であり、これらは一般のオリエンタリストの枠組、すなわち現在の日本は劣っていて過去の日本は優れていると見なすような枠組みで描かれるのか、またはそれと異なる枠組みで描き出されるのかについての考察の基本となるものである。「東一西軸」には「西洋」「アジア」等のキーワードがあり、これらの言葉は日本が「東洋」と「西洋」を正反対のものとして見なすオリエンタリストの枠組みのなかにあることを理解するためのものである。

2. 『マレー日本』の分析

これから分析する『マレー日本』の第1版、4版、8版には継続性もあるが、それぞれの時代を反映した変化もみられる。以下、第1版、4版、8版における日本の表象を時代を追って論じ、その継続性と変化を論じていきたい。

1) 『マレー日本』第1版(1881)¹⁾

『マレー日本』第1版の東京の歴史という部分に注目してみよう。そこでは、「古い日本」への郷愁とそれが失われることへの恐れが次のように描かれている。

「侍が消えて、駕籠が人力車によって取って代われ、上流階級のかかりの人が洋服を着用し、髪型がヨーロッパ風になった、今では普通になったこれらのことが、外国人にとって大変魅力的な

ピクチャレスクな情景を日本の街から消し去った。」(Satow & Hawes 1881, 8)

この文章からは「古い日本」を懐かしみ、それが西洋の文化と混淆したり、置き換えられたりすることへの嘆きが読み取れる。これは著者ばかりでなく当時英国から日本を訪れた人々の好みをも反映している。このようなヨーロッパ風の風景の流入に対する反発はガイドブックのなかに繰り返しまられるが、それは次のような表現にも伺われる「新橋から京橋にかけてつながる一連の醜いレンガの建物」(1881, 8)。さらに、最初に引用した文章からは、日本についての観光言説における「ピクチャレスク」の意味について知ることができる。18世紀の産業化や都市化に対する反発として生じたロマン主義は、当時日本の観光イメージを作るにあたって大切な要素であった。Littlewoodが日本のイメージについての彼の研究のなかで指摘しているように「ピクチャレスク」という言葉は「絵のような」ということを意味し、そしてここでは「伝統的な」日本は絵のように時の流れのなかに閉じ込められていることを意味している(Littlewood 1996, 64-66)。西洋化はこの時間の止まった絵のような光景を突き崩そうとするものとみなされる。

前述の引用、または「腹切り」の多数の引用で明らかになるように「侍」は「古い日本」という概念と密接な関係にある。「はらきり」は当時の英国で広く知られているので、著者は説明なしで日本語のローマ字読みで「harakiri」と書いた。しかし主な著者の経験を考える時、このガイドブックにみられる侍などの「古い日本」の消滅に対する嘆きは驚きに値する。Satowは英国の公使館の代表者として腹切りを目撃している上に、1868年には英国外交団の委員として尊王攘夷派の2人に襲撃された経験も持つ。

2) 『マレー日本』第4版(1894)

第4版の日本紹介の部分は「手短に言えば、旧制度の全ての要素は新制度に置き換えられた」と始められている(Chamberlain & Mason 1894, 1)。それから続いて、「好奇心を持つ人のために幸いなことには、彼女(日本)はまだ変化の途上であり、その特徴を保ち続けている」。これらの引用

からは、「古い」日本が「新しい」日本へと変容し、伝統が消滅の過程をたどっている様子がわかるが、第1版と異なり第4版では存続している伝統もあるとして日本を表象する。さらに、この文章は日本を女性名詞で表し、日本の無力さや弱さを強調する。こうした書き方はオリエンタリスト言説によくみられるものである (Said 1978)。この弱い日本への西洋の脅威を描いてから、著者は「古い日本をできるかぎり見たい人々は早く来ないといけない」(1894, 2) と、あたかも絶滅危機種の最後の姿を見届けることを英語圏読者に呼びかけるような記述がみられる。日本の伝統文化がだんだん西洋文化によって消滅させられるという概念の基礎には非西洋文化が弱く、西洋文化が強いという言説がある。前述したよう、社会的進化の結果として非西洋の人種や文化は消えるという思想は当時の英語圏諸国で広く普及していた (Hofstadter 1992)。こうした思想がこのガイドブックに反映されていると言えるであろう。

第1版と同様、腹切りは「昔の日本の英雄的行為」として描かれる (1894, 327, 325)。侍と腹切りは西洋と日本を区別し、さらに誠実さ、武勇、名誉等の産業社会のなかで失われた道徳と「古き良き」封建時代を彷彿させる象徴として使われる。さらに、読者は日本の非観光的な場所を訪れ、好奇心を持って「本当の日本」を知るように促される。「本当の日本の生活」を知りたい読者は「外国人居留地を避けるべきだ」とされた。一方、都市部では典型的な伝統的日本だけではなく、「新日本の西洋的衣服、政治的講演、クラブ、学校、病院や教会」がみられるとされる。日本の都市部では新旧、東と西の強いコントラストが表象される。このコントラストは純粋な日本の伝統的な文化を脅かすものとして好ましくないとされている。この版でも、日本は「ピクチャレスクの愛好者の天国」として表現されるように「ピクチャレスク」は「古い日本」を象徴する主題として用いられる。

3) 『マレー日本』第8版 (1907)

第8版の紹介部分では、日本は西洋化され「古い日本」が消滅されられたという主張はみられない。その代わりに、著者は日清戦争での日本の

勝利とそれがもたらした「国際社会における有力な国としての日本の名声の上昇」を述べる (Chamberlain & Mason 1907, 1-2)。また、「西欧化は破竹の勢いでは進まない」とし、「日本は変身したが、未だ古代の基礎の上に成り立っている」とされる。これには日清戦争 (1894-1895 年)、日英同盟 (1902 年) や日露戦争 (1904-1905 年) 後に日本の軍事的、政治的な力が発揮されたという事実が背景になっている。

このガイドブックにおいて、日本に関する時代、伝統やオーセンティシティの表象は変化した。第4版では日本の伝統的文化は消滅しつつあるように見えるが、第8版ではこの伝統文化は現在においてもいきいきと息づいている。ここに表象される日本は現代化、西洋化の途中にある一方、古い日本伝統に根付いている本質は変化せず、西洋文化との違いを保ち続けている。この描写は日本の紹介部分のみにみられ、観光地紹介の頁では、こうした現代日本のなかの「古き日本」の描写はみられない。

3. 『LP 日本』の分析

次に、『マレー日本』第8版 (1907) から約80年後に出版された、ロンリー・プラネット社の日本ガイドブックにおける日本表象を、第1版から3版に焦点を絞って論じてみたい。

1) 『LP 日本』第1版 (1981)

『LP 日本』の第1版において日本の観光的魅力は伝統にあると表象されている。伝統的日本は唯一のオーセンティックな日本とされ、またそれは現代化によって破壊されたと描かれている。東京が「殆ど歴史的・観光的な魅力がない」とされるように、現代日本は旅行者の関心を引き寄せる価値があるものとして描写されることはまれである (McQueen 1981, 123)。ここでは旅行者は伝統的祭りにオーセンティックな日本を見出すように促される。日本の祭りは伝統に根ざした日本へつながるものとして描写されており、祭りは「日本人の本当の心を反映し、日本人の原点と再び結びつくものである」と紹介されている。(1981, 54)。

日本と西洋の違いを象徴するものとして著者は性の表象を用いる。例えば、「内気そうな態度に

反して、日本の女性は（西洋の女性と比べて）性的に解放されている」と記述される（1981, 67）。しかし、著者は日本女性を人生の伴侶とすることには懐疑的であった。人生の伴侶とするのに最も適切なのは「高い教育を受け、英語を学んだ女性」であり、彼女らは言語の壁を乗り越える助けとなり、「成熟した女性としてより西洋女性に近い振る舞いをし、話し相手としてより面白い可能性が高い」と描写される（1981, 67）。観光については古代の伝統に根ざした「純粋な」日本は最も魅力的だとされる一方、人間関係においては「日本」と「西洋」の組み合わせが最もよいとされるのは興味深い点である。この組み合わせの利点を述べることによって、ここでも著者は西洋と日本（あるいは東洋）を決定的に異なり、相容れないものとして扱う枠組みに基づいて日本を表象する。日本女性が一般的に好意的に表象される一方、日本男性については性的な脅威として全く対照的に表象される。日本人男性は西洋女性の性的傾向について「歪んだイメージ」を持ち、「誰とでも寝ると思ひ込んでいる」（1981, 67）とされる。さらには、こうした日本人男性の思い込みを正し、性的被害を防ぐため裏表紙の内側1頁を使い、日本語および英語併記の文章を載せた。女性と男性の表象において、著者は日本と西洋の違いを強調し、共通点は顧みない。

2) 『LP 日本』第2版（1986）

第2版ではオーセンティックな日本が伝統のなかにのみ存在しているという表象から離れ始める様子が見える。日本紹介の初めに「日本を初めて訪れる殆どの人々は将軍、侍、芸者、桜、禅寺や富士山といったものに基づいた先入観を持っている」と著者は述べる（McQueen 1986, 1）。それに続いて、日本には「それだけではなく、古さと新しさの複雑な組み合わせ」があり、日本人は「何百年も前の社会制度や秩序に未だ支配されているが、20世紀の西洋の技術や政治をうまく取り入れた」と評した。ここでは、LPの日本言説は伝統のみから、「旧」と「新」、「東」と「西」の対比やそれらが融合した分野へと中心を移した。東京の表象の変化は現代日本の認識を反映する。第1版では「殆ど歴史的・観光的な魅力がない」

（1981, 119）とされたのに対し、第2版では「殆ど歴史的な魅力はない（太字筆者）」（1986, 123）となっている。

こうした変化と共に、日本と西洋の性に関する違いを強調する表現は減少した。日本男性が西洋女性を性的に脅かすとした部分は殆ど消え、日本女性が一般的に性的に自由であるとした表現も大幅に削られた。この結果、日本と西洋の違いの強調が抑えられ、日本の表象は一般的なオリエンタリスト言説から離れて行く。これは日本女性の社会的な地位の向上、そしてガイドブックの女性読者への意識、第2版から関わった女性編集者の影響、また第1版での日本男性の表象に偏見が含まれていた点への反省等を反映したものと思われる。

3) 『LP 日本』第3版（1989）

第3版では、日本が「アジア的」あるいは「東洋的」であり、西洋と異なっていると直接的、間接的に表象される表現の増加がみられる。国全体を紹介する部分では、日本は「非常に異国的、非常にアジア的で、新しい文化、社会や人間関係を経験することができるとされている」（McQueen 1989, 64）。一方、著者は「日本人論」を批判し、日本人が自国の文化や人種を特別視したがることを、「海外に関する非常に乏しい知識に基づいた、空想的な自国の捉え方」だとした（1989, 23）。日本人が西洋人と異なる、または「アジア的」だとする表象は人間関係を説明する箇所に見える。外国人に慣れていて英語が達者で西洋的に振る舞うことのできる日本人を相手にする時でさえ、「心を開き過ぎない方が良い」と書かれている（1989, 59）。この意図するところは、日本人は西洋人と本質的に異なっている、ということであろう。「日本人のお辞儀はそれ自体が高度な技術なので真似しない方が良い」（1989, 58）等の表現を見ると、この版は日本人と西洋人を隔てる壁をいっそう強調しようとしているように思われる。著者は自らを「反日本人論派」としながら、この版では日本が「アジア的」「東洋的」であり、西洋と違うという概念を強調する結果となっている。

第3版では、日本人の性の捉え方が西洋と異なるとする表象は更に減少した。セックス産業のセクションでは「多くの国と同様、日本ではセック

スは消費的な娯楽」(1989, 29)であり、日本人の性とセックス産業は特別ではないという印象を与える。日本における男女平等とその変化に関する部分では「男性支配社会からより平等な社会への進化が観察できる興味深い時代」(1981, 26)と述べたことから分かるように、この変化を歓迎し、また西洋の類似した歴史も強調した。これは日本社会の実際の変化、LP側の編集方針や読者対象の女性への拡大を反映していると思われる。

4. ガイドブック分析の要約

『マレー日本』ガイドブックシリーズの3冊を通して見る時、「旧一新軸」に沿って分析すると、そこには日本の表象に関しての変化がみられるが、「東-西軸」に則して分析すると、3冊に描かれる日本の表象に変化はない。前者については、第1版では侍、腹切り、ピクチャレスク等を「古い日本」の象徴とする古き良き日本を懐かしみ、それを唯一のオーセンティックな日本としながら「古い日本」の消滅を嘆いている。日本の伝統文化が西洋文化によって消滅させられるという概念の基礎には、非西洋文化は弱く西洋文化は強いという、当時の西洋で普及していた言説があると思われる。第4版では、日本の都市部では旧と新、東と西の強いコントラストが表象される一方、それをオーセンティックな日本としては紹介していない。しかしながら、日本が戦勝国となった後の第8版ではそうした表象に変化がみられる。著者は、近代化に直面した日本の古くからの伝統の強靱さを強調する一方、この近代化を観光それ自体にとって価値のあるものとしては表象していない。それに対して、東洋と西洋の枠組みで見る後者の分析では、第1版と後の版において言説の変化は殆どみられなかった。『マレー日本』は日本を「オリエンタル」「アジア的」「東洋的」というような明確な枠組みに当てはめることはしていない。だがYokoyamaが述べるように(1987)、『マレー日本』にみられる言説は、当時の時代背景に基づく西洋との類似性については言及しておらず、日本の政治的社会的変化を日本の本質に根ざすものと位置づけている。この結果、西洋とオーセンティックな日本とを完全に対立的に見るような言

説が生まれた。

1980年代の『LP日本』ガイドブックを通して分析する時にも日本に関する言説の変化がみられた。「旧一新軸」にしたがって分析してみると、第1版は『マレー日本』と同様にオーセンティックな日本を「古い日本」と表象する。しかし、第2版と第3版にこの表象に変化があり、2つの主要な言説がみられる。1) オーセンティックな日本が「伝統」や「古い日本」のみにあるといった言説、2) オーセンティックな日本を「古い」ものと「新しい」もの、あるいは「東」と「西」の対比やこれらが融合した形として表象する言説である。1)の言説はSaidが言うオリエンタリスト言説に当てはまる一方、2)は新しい形の言説だと言える。2)の言説には日本の現代的文化がある程度認められている。これは1980年代当時の英語圏諸国における日本の経済的、政治的、文化的な力の上昇を反映していると思われる。これにより、現代の日本文化は模倣のみで形成されているのではなく、創造的で先駆的なものも生み出していると認識された。1990年代からこうした現代日本の表象は「cool Japan (かっこいい日本)」と称され始めた(Sugimoto 2010, 21)。しかし、2)の言説はSaidが言うオリエンタリスト言説とは異なるとは言え、やはりオリエンタリスト的だと言える。2)の言説でも1)と同様、「古い」ものと「東洋」を、「新しい」ものと「西洋」を同一視し、日本と西洋を別のものとして考えるようにするのである。そして、2)は西洋諸国においても「古い」ものと「新しい」もの、「東洋」と「西洋」が融合、あるいは対立していることを認めておらず、あたかもそれらが日本独特の要素のように取り扱い、言説のなかで西洋と日本(や東洋)をはっきり分ける。

東洋と西洋を区別する別の興味深い表象の変化もみられた。『LP日本』の第1版と第2版において日本は決定的に「東洋的」「アジア的」としては描かれなかったが、第3版では明確に日本を東洋文化圏とし、読者が属する西洋文化圏との違いを強調した。この変化は、社会的背景、または著者の意見を反映するものであろう。この版で著者は、当時最盛期を迎えた日本人や日本文化を特別

視とする「日本人論」を批判する。日本を「アジア的」と描くことによって、著者は日本文化が東洋圏において特別ではないことを主張する。それは当時英国圏メディアによって日本と西洋諸国の共通点が報道される (Sugimoto 2010) のに對抗して、著者は日本をアジアのなかの一国として捉えることにより、その「異国性」をアピールしようとしたという見方もできるであろう。日本に「東-西」「旧-新」の対立と融合を見る上述 2) の言説もこの背景を反映していると思われる。

ジェンダーと性は日本と英語圏諸国の違いを象徴するものとして表象された。性に関して第1版は日本の女性を性的に自由とし、男性を性的な脅威として描き、一般のオリエンタリスト言説に当たると考えられる。しかし、第2版と第3版に渡ってこの言説は希薄になり、ジェンダーにおける日本と西洋諸国の共通点が強調された。第2版からガイドブックの作成に関わるようになる『LP 日本』の編集者の影響が重要である。編集者の殆どは女性なので、こうした問題には関心があったと思われる。ここで明らかになるのは、Iaquinto (2011) が指摘するようにガイドブックの研究をする際、編集者の影響を検討する必要があることである (2011)。

V 結 論

以上論じてきたように、本論文で取り上げた日本に関するガイドブックの2つの出版最盛期——19世紀末と20世紀末には、日本に関する観光言説に顕著な変化や多様化がみられる。そして、この変化や多様化は2つの時期ばかりではなくその間の時期にもみられ、それらは出版当時の歴史的出来事や流行に影響されている。観光言説の変化には日本と英語圏諸国との間の経済的、政治的関係が重要だといえよう。つまり、2つの時期の観光言説の変化を考える時、19世紀末における日本の軍事的、産業的、政治的な力、そして20世紀末における日本の経済的、文化的な力の上昇が見逃せないのである。本稿では、この言説の変化は日本女性の社会的地位の向上や日本人のアイデンティティに関わる議論 (日本人論) にも結び

付いていると論じた。さらに、言説の変化と編集者の役割や出版会社の方針の重要性を明らかにしてきた。

また本論文では、観光的言説を研究するに当たり、言説の多様性や流動性、そして日本国内及び日本と英語圏諸国との間の歴史的、経済的、社会的変化とその影響を検討する必要性を明らかにした。この点はガイドブックの言説をみる先行研究では見逃されていたことである (Bhattacharyya 1997; Tegelberg 2010)。さらに、言説の変化は各ガイドブックシリーズや、発行の時期の違いにもあると考えられる。19世紀末の英語ガイドブックは学問的で客観性を重視する一方で、20世紀末の英語ガイドブックは旅行者の体験や著者の主観性を重視するという傾向がみられる。これには、訪日する旅行者の大衆化などの変化も反映されている。

日本を紹介する英語のガイドブックにおける日本に関する言説が変化し多様化した一方、未だ日本を東洋と西洋が対立するオリエンタリスト的枠組みのなかに見ようとする立場もみられる。このオリエンタリスト的言説はいわゆる「発展途上国」のみならず、先進国にも使用されていることが本稿で明らかになった。日本の場合、これらのオリエンタリスト的言説は Behdad が指摘する (1994) 一般的な観光的オリエンタリスト言説ほど極端なものではないが、しかし、ガイドブックにおける日本表象に、こうしたオリエンタリスト言説の枠組みが底流として存在し続けていることは確かである。こうしたいまだ根強いオリエンタリスト言説が、ガイドブックを発行する英語圏諸国と日本との政治的・経済的力関係にどの程度影響されているかについては、さらなる研究が必要であろう。近年、「旧」と「新」、「東洋」と「西洋」の対比や融合を強調する 2) の言説は中国、韓国やシンガポール等の他国の表象にもみられる。こうした新しいオリエンタリスト的言説の初期の例として、日本についての言説は現代の観光におけるオリエンタリスト言説を理解するためにも重要である。

本論文では、19世紀末からの観光メディアにおいて、現代の英語の観光言説はいかに発展してきたかを示した。日本についての言説のみならず、

他の非西洋諸国の観光言説や現代の国際観光と観光メディアを理解するための手がかりになることが期待される。今後の研究では1990年代のLPガイドブックにおける日本や他国の表象を分析する必要がある。また、同時代の異なるガイドブックシリーズの比較や、ガイドブックと並んで主要な観光メディアの一つとなったインターネットメディアが描写する「他国」を研究することも今後の重要な研究課題である。

注

- 1) ただし、前述した通り、第1版はマレー出版物ではなかった。

参考文献

英文文献

- Behdad, Ali. *Belated Travelers*. North Carolina: Duke University Press, 1994.
- Carr, Helen. "Modernism and Travel (1880-1940)." In *The Cambridge Companion to Travel Writing*, edited by Peter Hulme and Tim Youngs. Cambridge: Cambridge University Press, 2005.
- Chamberlain, B., and W. B. Mason, eds. *A Handbook for Travellers in Japan*. 4th ed. London: John Murray, 1894.
- Chamberlain, B., and W. B. Mason, eds. *A Handbook for Travellers in Japan*. 8th ed. London: John Murray, 1907.
- Elliott, Andrew. "Anglophone Travel Writing and the Japanese Interior, 1852-1899." PhD thesis, Kyoto University, 2010.
- Gretton, John. "Introduction." In W. B. C. Lister, *Murray's Handbooks for Travellers*. University Publications of America, 1993.
- Hofstadter, Richard. *Social Darwinism in American Thought*. Rev. ed. (1955). Reprint, Boston: Beacon Press, 1992.
- Iaquinto, Benjamin. "Fear of a Lonely Planet: Author Anxieties and the Mainstreaming of a Guidebook." *Current Issues in Tourism*, 14: 8 (2011), 705-723.
- Kato, Megumi. *Narrating the Other*. Melbourne: Monash University Press, 2010.
- Lehmann, Jean-Pierre. *The Image of Japan: From Feudal Isolation to World Power, 1850-1905*. 1978. Reprint, London: Routledge, 2011.
- Littlewood, Ian. *The Idea of Japan*. Chicago: Ivan R. Dee, 1996.
- Macfie, A. L., ed. *Orientalism: A Reader*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2000.
- McQueen, Ian. *Lonely Planet Japan*. 1st ed. Melbourne: Lonely Planet, 1981.
- McQueen, Ian. *Lonely Planet Japan*. 2nd ed. Melbourne: Lonely Planet, 1986.
- McQueen, Ian. *Lonely Planet Japan*. 3rd ed. Melbourne: Lonely Planet, 1989.
- Minear, Richard. "Orientalism and the Study of Japan." *The Journal of Asian Studies*, 39: 3 (1980) 507-517.
- Oguma, Eiji. *A Genealogy of 'Japanese' Self Images*. Translated by D. Aske. Melbourne: Trans Pacific, 2002.
- Santos, Carla. (2004). Framing Portugal: Representational dynamics. *Annals of Tourism Research*. 31 (1): 122-138.
- Said, Edward W. *Orientalism*. Rev. Ed. (1978). Reprint, New York: Vintage Books, 1994.
- Satow, E., and A. Hawes, eds. *A Handbook for Travellers in Japan*. Yokohama: Kelly & Co, 1881.
- Selwyn, Tom, ed. *The Tourist Image: Myths and Myth Making in Tourism*. New York: John Wiley & Sons, 1996.
- Sorensen, Anders. (2003). Backpacker ethnography. *Annals of Tourism Research*. 30: 4 (2003), 847-867.
- United Nations World Tourism Organization (UNWTO). "UNWTO World Tourism Barometer, 2013." <http://mkt.unwto.org/en/barometer>. Accessed Feb 15, 2013.
- Urry, John. *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. London: Sage, 1990.
- Wheeler, Tony. *Across Asia on the Cheap*. 1973. Reprint, Melbourne: Lonely Planet, 2010.
- Wheeler, Tony, & Wheeler, Maureen. *The Lonely Planet Story*. Surrey: Crimson Publishing, 2008.
- Wilkinson, Edymion. *Japan Versus the West: Image and Reality*. England: Clays Ltd, 1991.
- Yokoyama, Toshio. *Japan in the Victorian Mind: 1850-80*. Basingstoke: Macmillan, 1987.

邦語文献

- 長坂契那「明治初期における日本初の外国人向け旅行ガイドブック」『社会学研究科紀要』第69号, 2010年, 101-115頁.
- 前田勇(編集)『現代観光総論』学文社, 2010年.
- 山口誠『ニッポンの海外旅行』筑摩書房, 2010年.
- 横浜開港資料館『世界漫遊家たちのニッポン』横浜開港資料普及協会, 1996年.

Changing Discourses in Anglophone Guidebooks on Japan

—— Two Peak Periods for Guidebooks and the *Murray* and *Lonely Planet* Series ——

Daniel MILNE

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary This article analyzes the touristic discourses of Japan found in English-language tourist guidebooks. The author focuses on two major publishing periods (the late 19th and late 20th century), and through post-colonial theory analyzes the guidebook series found to have been the most popular during each period (*Murray Guidebooks* and *Lonely Planet*). This analysis focuses on representations of Japan along axes of ‘old’ and ‘new’ and ‘Eastern’ and ‘Western.’ It is found that discourses on Japan in these guidebooks changed and diversified both within each series and between the two periods. This discursal change was found to be connected to historical events and social developments, relationships between Japan and English-speaking countries, and in editorial and other changes in the guidebook publishers. These discourses generally fitted either a conventional Orientalistic framework of authentic Japan as ‘Eastern’ and ‘old’ and essentially different to the West, or into a newer Orientalistic framework in which contrasts between ‘East’ and ‘West’, ‘old’ and ‘new’ were set up as unique to Japan.